

2020年3月 松原康雄学長から卒業生へのメッセージ

ご卒業・ご修了おめでとうございます。保証人の方々にも、心からお祝いを申し上げます。明治学院大学は、新型コロナウイルス感染症の影響拡大に伴い、関係する皆様の健康面、安全面を考慮し、感染リスクを回避するため、卒業式、修了式を大変残念ではありますが、中止するという決断に至りましたので、ビデオメッセージでお祝いとお別れの言葉を述べさせていただきます。

本学創始者のひとりであるヘボン博士が来日し、ヘボン塾を開設してから、やがて160年になろうとしています。この間、人類は結核をはじめとして、多くの疾病と対峙し、予防や治療の方法を見出してきました。今回の新型コロナウイルスについても、同様の成果が早期に得られることを期待しています。関連して心配なことは、諸外国で日本人やアジア系の人々が暴行を受けたり、会場から締め出されるなど、いわれない差別や偏見にさらされていることです。我が国でも、同様の懸念があります。

絆が疾病によって断たれることは容認できません。人と人の連携や相互協力があってこそ地域社会は発展していくものだからです。人は孤立して生きていくことはできません。皆さんも、在学時代培った情報リテラシーを活用しながら、人が相互に憎みあう、一方的に虐げられる状況を作り出さないよう努めてください。

ヘボン博士は、ニューヨークで医師、病院経営者として成功をおさめていた人物ですが、それを投げうって、陸路と海路を経て日本でのキリスト教普及と、医療・教育に力を注がれました。その働きは、連綿として現在の明治学院大学・大学院に引き継がれてきています。本学卒業生である文学者島崎藤村が作詞した校歌では、「心せよ学びの友よ新しき時代（ときよ）は待てり」と唄われています。「新しき時代（ときよ）」は座して待っていても来ません。主体的な「働き」があってこそ、実現するものです。皆様方も、学部・大学院の学びやキャンパス活動のなかで、次のステップを始める展望を抱かれていますと思います。是非。皆さんが抱かれる展望が多くの人との協力のもとに、現実化していくことを願っています。仮に、それが、自分のなかで一番大切なことであっても、他者からすれば大したことではないかもしれません。また、その逆もあるでしょう。だからといって、他者を切り捨てることはできません。他者の想いを大切にすることが、自分の想いをとげていく起点となります。今後進路は異なっても、新たな学びと他者とのかかわりを得ていってください。

次の時代、そしてより良い社会を目指す変革の主役は若い世代、すなわち皆さんです。本日は卒業・修了誠におめでとうございます。

2020年3月

明治学院大学学長 松原康雄

2020年3月 小暮修也学院長から卒業生へのメッセージ

皆さん、大学・大学院のご卒業おめでとうございます。また、保証人の皆さま、ご家族の皆さま、ご子弟のご卒業を心からお喜び申し上げます。

さて最近、内田 ^{たつる} 樹さんと中沢新一さんの対談集『日本の文脈』という本を読みました。そこには「贈与(贈ること)」「被贈与(贈られること)」が書かれています。

明治学院に即して言えば、ヘボン博士ご夫妻を抜きには語れません。ヘボン夫妻は1846年から13年間、ニューヨークで4つの病院を経営するまでになりました。そしてニューヨークで5本の指に入るほどの資産家になります。けれども1859年にそれらの資産を全て処分し、日本に渡ってきます。そして横浜で医学・英学を教え、お金のない人にも治療し、『和英語林集成』という本格的な英和・和英辞典を編纂し、ヘボン式ローマ字も考案しました。さらに新約聖書・旧約聖書を日本語に翻訳し、横浜には指路教会を建てました。

ヘボン先生は44歳で来日し、77歳の時に去ってゆかれました。けれどもヘボン博士は「私は普通の人と何ら変わることはありません。ただ、少し忍耐強かったです」と語っています。

私たちがこのヘボン夫妻や創立者から多くの贈り物を受けたという感謝の心を持ち、今度は私たちが他の人にお返ししていこうという気持ちを持つときに、明治学院は健全に機能していくでしょう。皆さんもここまで来るのに、多くの人から「贈り物」を受けてきたと思います。そのことを忘れないで生きてほしいと思うのです。

明治学院大学では、Do for Others というスクールモットーを持っています。皆さんはこれから「自分を大切にしてほしい」、そして同時に「他者を大切にしてほしい」と願っています。

ご卒業おめでとうございます。

2020年3月

明治学院学院長 小暮修也